

世界に羽ばたけ！ 米山学友②

子どもが未来の夢をつかめる国に

思いがけない受賞の知らせ

チャンタソンさんの元に、国際児童図書評議会（IBBY）朝日国際児童図書普及賞受賞の知らせが届いたのは、今年の4月。永続的でユニークな活動を行う、青少年のための読書活動推進団体を表彰するこの賞は、2年に一度、IBBYの各国支部による推薦候補の中から、2団体に贈られます。今回はルワンダの団体とともに、チャンタソンさんが共同代表を務めるNPO法人「ラオスの子ども」が受賞しました。

NPO法人の前身、「ラオスの子どもに絵本を送る会」の設立から26年。日本を拠点に、一貫して母国の教育環境改善のために取り組んできたことが世界的な評価を受け、選考委員会の満場一致で決まったという受賞に、チャンタソンさんは、喜びと感謝の思いをかみしめました。

絵本の楽しさを母国の子どもたちに

ラオスに絵本を送ることを思いついたのは、娘の育児を通じて得た体験からでした。まだ1歳にもならないうちから絵本にくぎ付けで、母親の読み聞かせに耳を傾け、新しい言葉を吸収して成長していく姿に目を見張りました。母国ラオスでは、本は子どもたちにとって遠い存在です。町には本屋もなく、学校には図書室もなく、授業でも教科書を持っているのは先生だけで、子どもたちは、先生が板書する内容をひたすら書き写すのです。そこには娘のように、本がいざなう未知の世界に目を輝かせる、子どもたち本来の姿はありませんでした。

「娘の大好きな絵本の楽しさを、ラオスの子どもたちにも届けてあげたい」そんな思いから1982年、周囲の友人たちとともに、絵本を送る活動を始めました。

翌年、米山記念奨学生に選ばれ、勉強だけでなく、奉仕や交流にも熱心なチャンタソンさんは、世話クラブの東京銀座ロータリークラブ（RC）の会員から温かく



コペンハーゲンでのIBBY世界大会で、活動の紹介をするチャンタソンさん

迎え入れられました。絵本を送る活動にも会員から多くの支援が集まり、当時から応援してくれていたカウンセラーやロータリアンとは、現在も交流が続いています。

「ロータリアンの皆さんと接する中で、“経営”という視点が養われたように思います。一過性ではなく、継続して事業を運営できる仕組みを考えることが何より大切だと、学ばせていただきました」。それは、現在の活動にさまざまな形で生かされていると言います。

送ることから人材の養成へ

やがて活動は、本を送ることからラオス国内での出版へと変わります。ラオスの人々が、自分たちの力で継続できるようにすることが重要だと考えたからです。これまでにラオスで出版した絵本や児童書は、延べ145タイトル、67万冊に上ります。

学校の図書室開設支援にも協力。従来の重い図書箱は運搬に不便なことから、女性でも背負える布製のウォールポケット型図書袋を開発し、山岳部の学校への図書普及に大いに貢献しました。

しかし、届けるだけでは十分ではありません。子どもだけでなく、教員も本に接した経験が少ないために、十分に活用されずにしまい込まれることが多かったので



よねやまだより

日本でも最近、絵本の読み聞かせや音読の教育効果が注目されています。しかし、世界には、子どもたちが身近に本と接することができない国も数多く存在します。今回紹介する米山学友、チャンタソン・インタヴォンさんの母国ラオスもその一つ。チャンタソンさんは読書推進活動を通じ、母国の子どもたちの教育環境の改善に、25年以上もの間取り組んでいます。そんな彼女が目指す、人生を賭けた目標とは――。

す。そこで、教員や教員志望の学生に、読み聞かせや紙芝居の実習、図書の補修や貸し出し管理など、さまざまな読書推進活動の研修を行いました。この研修は、国からも評価され、現在ではラオス教育省の教員養成学校カリキュラムにも取り入れられています。

I B B Y賞の選考委員会でも、子どものための直接的な働きかけにとどまらず、それを継続して推進する教員の養成にまで活動が及んでいる点が、高く評価されました。9月にデンマーク・コペンハーゲンで開かれたI B B Y世界大会での授賞式を機に、多くの国から「ラオスのこども」の活動を学びたい、との問い合わせが続いています。

「私たちの活動が、世界のどこかのいまだに本に接する機会のない子どもたちの役に立てれば、こんなにうれしいことはありません」

ラオスの子どものために始めた活動は、世界の子どものための活動として広がりを見せつつあります。

自らの文化に誇りをもてる教育を

今、チャンタソンさんが残りの人生を賭けて取り組もうとしているのは、地方の状況改善を共に考えていくことのできる、少数民族のリーダーとなる若者を教育することです。そのための学校をつくりたいと、私財をはたいて用地ねんじゆつを買ひ、建設費の捻出に苦慮しながらできるだけ早いスタートを目標にしています。チャンタソンさん

プロフィール

チャンタソン・インタヴォン さん

(1983 - 86年 / 東京銀座RC) ラオス出身。1974年来日。お茶の水女子大学修士課程、東京都立大学博士課程で教育行政を専攻。通訳・翻訳家、ラオス文化講師。「ラオスのこども」共同代表など。92年日本青年会議所T O Y P賞、99年毎日国際交流賞、00年アジア女性人権特別賞受賞。



は言います。

「私は、国が大切にしないものを大切にしたい。芸術・文化、農業や社会学、民族固有のアイデンティティーやボランティア精神など、経済発展を重視する陰で、国が忘れ去ろうとしているものに光を当てたいのです。子どもたちが自らの文化に誇りをもち、自分の村や民族の将来を考えていける教育を実現したいと思います」

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

醍醐寺観音堂の一日も早い復旧を願って —— 第2750地区 ——



京都の研修に参加した奨学生ら

第2750地区パストガバナー、仲田順和氏(東京港南RC)が執行長を務める京都市の醍醐寺は、今夏、落雷により観音堂が焼失しました。翌朝、ニュースを聞いた地区の米山奨学生や学友から「自分たちにできることはないか」との声が続々と寄せられました。

地区米山記念奨学委員会では昨年秋、奨学生らに日本の伝統文化に触れてもらおうと、京都特別研修を企画。仲田氏の厚意で、世界遺産の醍醐寺内に宿泊し、境内の清掃や朝の勤行など、通常では得られない体験をしました。今回の悲報で、研修参加者の奨学生や学友、ロータリアンなどから23万1,000円の見舞金が集まり、励ましの手紙を添えて届けたところ、仲田氏は「何よりもうれしい支援」と、感激の面持ちで語りました。